

序文

日本造血細胞移植データセンター(JDCHCT)から平成 27 年度全国調査報告書が発刊されるに当たり、データを登録していただいた先生方並びに解析を担当されました JDCHCT の皆様にお礼を申し上げます。このデータは年を重ねるに従い、ますます膨大なものとなって参りました。これらのデータは疾患別・疾患横断的なワーキンググループで議論され多くの論文が作成され、新しいエヴィデンスの構築に寄与してまいりました。またソース別や県別のデータにより、現在の移植の動向や各地方の現状がわかるだけでなく、将来の予測にも大いに役立ちます。県別のデータでの解析により「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」に基づき行政や医療機関が、今やるべきことが見えてきます。今回の総会では長期生存者の将来どのくらい増えるかの予測をするうえで、本データに負うところが大きかったです。この解析では最初に過去 40 年間の全患者の生存曲線を TRUMP データから計算しました。さらに、年度総移植数を過去 10 年間で最近のトレンドから移植数の将来予測を行いました。数十年後には今の 10 倍の長期生存者が見込まれ、彼らをどのようにフォローしていくのかを考える上で貴重な材料となりました。

近年多くの分子標的薬や細胞治療製剤が開発される中、今年の一つの新薬の第四相試験のデータを日本造血細胞移植学会と JDCHCT が協力して集めることになりました。これは学会と JDCHCT が責任を持って市販後の安全性や有用性について、積極的に関与していくという他の医学学会にはない画期的なものです。今後も多数の新薬が開発されますが、その有用性については、RCT（無作為比較試験）の中で明らかになります。しかし移植領域は症例数が多くなく RCT が困難な場合もあり、そのコストは膨大です。今回のように RCT が行われなかった新薬については、質の高いアウトカムデータによる安全性と有用性の評価の役割も今後増えるものと思います。将来はさらに詳細な患者情報、次世代シーケンスによる遺伝子情報などを加えたメガデータにより、より信頼性の高い結果を得ることができる時代が来るものと期待しております。

最近血縁ドナーの安全情報の管理が JDCHCT のタスクに加わりましたが、今後非血縁ドナー安全情報との一元化を期待しております。さらには患者・ドナー細胞も遺伝子情報を持ったデータであるという新しい認識を共有し、少し遅れている血縁者間の細胞バンクの議論が進むことを望みます。最後になりますが、造血細胞移植全国調査は、日々の臨床の場に必要情報を作り出す源であり、さらに発展していくデータベースの構築のために、今後とも皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

序 文

ここに、平成 27 年度版の全国調査報告書をお届けする。

わが国における造血細胞移植は、Thomas 博士らによる近代的骨髄移植法の確立直後である 1970 年代にその黎明を迎え、1980 年代後半における末梢血幹細胞採取法の開発、1990 年代における骨髄バンク・さい帯血バンクの設立と非血縁者間造血細胞移植法の普及、2000 年以降の緩和的移植前処置法や HLA 不適合移植法の発展等のステップを経て、今日、世界でも最も隆盛を迎える状況に至っている。

本報告書は、その確実な歩みと最新の到達点を知るために必須の冊子であり、全国の移植チームの多大なる尽力が結晶したまさに「the fruits of our labor」である。わが国において何らかの形で造血細胞移植にかかわる全ての人々の座右に置かれ、さまざまな場面で活用してもらえることを願っている。

そして、本報告書を開いていただく際には、記録されているひとつひとつの移植にかかわった患者・ドナー・医療従事者を含む多くの人々の姿に想いを馳せていただきたい。それらの人々の不屈の意志と熱意こそが、わが国の造血細胞移植の発展を支える力であり、それぞれの資料にはその中に含まれている移植の実現のために費やされた膨大な時間と労力が凝縮されていることをあらためて感じていただければ望外の喜びである。

末筆となったが、日本造血細胞移植データセンターのスタッフをはじめとする本報告書の作成に関与した全ての人々に深い感謝と敬意の念を表したい。

日本造血細胞移植データセンター/日本造血細胞移植学会
造血細胞移植登録一元管理委員会委員長
一戸 辰夫